

一 跋両用

木 山 英 雄

【以下は、趙京華編訳『文学復古与文学革命——木山英雄中国現代思想と文学論集』（北京大学出版社、2004・9）なる書に付した「跋語」の日文章稿である。すでにその漢訳を使用済みの原文に二度の勤めをさせるのは横着に似るけれども、己れの退休を記念してくださるという特集に稿を寄せるのに、繰り返し語るほどのことはない研究歴の回顧を含む一文が偶々手元にあれば、それを以て責めを塞ぐのは勿怪の幸便でないこともない。すなわち、同じ横着なら、なまじ文を替えて変わりばえのせぬ事を語る、いわば両文にして一実よりは、いつそ同一跋語の日文ヴァージョンを遺しておこうか、と料簡する次第。それにしても、ほんらい別の目的のために草した一文ゆえ、少々場違いな節々が混るとしたら、そんなところは適宜読みとばしてくだされば結構。蛇足ながら、「題ハ其ノ前ニ標^かゲ、跋ハ其ノ後ニ系^かクル也」（説文段注）。編輯子におかれては、かかるものをゆめ巻頭に標げられることなどのなきよう。】

本書の編訳者趙京華君は、私がかつて在職した東京の一橋大学で、「周作人と日本文化」と題する研究により博士号を取得した。彼はその後もしばらく日本大学などで非常勤講師を勤め、最近社会科学学院の文学研究所に職を得て帰国したが、それと前後して、私の論文集を中国で出版することを企て、私に同意を求めた。しかし私には消極的な理由がいくつもあって、すぐには同意できなかった。その一、帰国後、彼が主にどういう仕事をするようになるのか、このことに私は大きな関心を持たずにはいられないが、それがはつきりしないうちに彼に貴重な時間を浪費させるわけにはいかない。その二、私は彼が情誼を重んずる人であることを知っているので、それだけに、万一彼の好意あふれる企画が、学問的あるいは文学的な判断に比べて、より多く私的な感情に発しているとしたら、それはいけないと思う。その三、以上の二点は彼自身が問題ないと保証すれば、それまでであるが、もっと大きな理由として、私は、自分の書いたものを漢訳して公刊することに、はたしてその「労」を償って余りある「功」を期待できるだろうか、という懸念を抑えることができない。しかし、彼はこの懸念に有効な反証を示す代わりに、ひごろ私の敬愛する北京の友人たちに計画をうち明けて彼らの応援を得、そのうえこれらの学人の信用によりさる大手出版社の刊行内諾まで取り付けて、私を押し切ってしまった。

とはいえ、私の懸念はまだ解消していない。ここには、私が五柳先生の如き達人の読書法とは異なつて、時に「甚解を求め」る余り行文が晦渋になりがちであることを含む、翻訳上の一般的特殊な困難も実際少なくはないと思う。事実、以前中国で発表された拙文の翻訳は、事前に訳稿が送られてきた場合を除くと、みな自分が読んでもほとんど理解できなかった。訳稿を事前に見て訂正を加えた結果は、少なくとも本人には理解が可能になるが、そして、今回は慎重な趙君がすべての訳稿について私に校閲を要求したのも事実ではあるが、しかし訳文が私自身

にどうにか理解できるからといって、懸念が解消するわけではない。なぜかといえば、私の書いたものの多くは、読書経験の言語化という変哲もない方法、ないしはほとんど無方法の産物なので、従って本書は、いわば漢文の解読の経験を述べた日文をさらに漢文に翻訳したようなものであるが、こうした漢文から漢文への一巡りの間に、いったいどれほどの価値が付加されているのか、私にはあまり自信がないからである。つまりそれは、外国人による中国文学の翻訳や注解をもう一度翻訳しなおすのに似た、徒労に終わるかもしれない。

以上は、本書の原著者が原著に対する自己認識に基づいて言うことである。自己認識に基づいている点で一定の根拠を主張しうるはずであるが、しかし、書かれたものに関する書き手本人の説明が、所詮は主観的であつたりあるいは別の意図があつたりして、かならずしも信用できるとはかぎらない、ということも事実であろう。道理からしても、書かれたものは人に読まれることの中でしか現実化しえぬ以上、否定的にも肯定的にも、書き手本人が決定的な判断を下す権利はないと考えるほかはない。その意味では、私もすでに翻訳に同意したからには、すべてを訳書の読者に委ねればよいのであろう。

ここで話は前にもどるが、このようにテキストの相対的独立を認める以上、わたしが上文に言った「読書の経験」も、書き手と読み手の二重の創造的行為を含むことになるはずである。読み手の方の創造性がどの程度であるかは、まさにわたしの自ら危ぶむ所であるとしても、とにかく理論上はそうではありえない。また事実においても、本書に収める最早期の『野草』研究の序で、わたしは「とにかく作品または表現の次元で一貫してみることに」、「ここでは、一つの道を行き着くところまで行ってみる」と言い、そのようにして、『野草』の連作的なテキストから読み出したところのものを、作者その人とことさらに区別する意味で、「魯迅の創った魯迅」と呼んでいる。これは、

作家の側が『野草・題辭』の劈頭に「沈黙中の充実」と「開口後の空虚」を言うのに対応しよう。「開口」はもちろんな比喩であって、不特定多数の公衆に向かって書面化した言語の「遊離と独在」（俞平伯）こそが問題の中心である。こうしたテキストの相対的独立観は、構造主義やらポスト構造主義やらのテキスト理論の類を知る以前もある程度知った以後も、わたしにおいて基本的に変化したとは思わないし、また一方で、歴史のコンテキストや作家の生活史に対して関係を閉ざすような意味でのテキストの絶対独立観には同調のしようもなかった。わたし自身は、外国文学を対象にして、つねに翻訳・注解の意識を持たざるをえない習慣から、自然とこのような考えに傾きやすかったにすぎないと思っている。

以下、本書において『野草』に関する生硬未熟な論考に始まり、幾つかの方面に及ぶ、わたしの関心の相互の關係につき若干の説明を加えておく。この論文での『野草』の読み方が、失敗による絶望者が現実を取り戻すまでの「哲学」的な自己再建の物語に集中したことに、当時のわたし自身の場合のなにがしかの反映があったことは事実であるが、それが「論理と方法」と題するような内容に終始したことがわたしには不満で、これを書き終えるとき、二つの課題を考えた。一つは、詩的な隠喩に忠実に『野草』の全編を再読することで、なんと四十年後に、本書にもその一部を収める放送大学の教科書の形で、ようやく実行した。もう一つは、『野草』哲学のいわば応用篇として、三十年代の左翼作家としての魯迅を研究すること。これはしかし、結局実行せずに終わった。強いてその理由を挙げれば、建国後、魯迅の声望がますます高まる一方で、蕭軍、胡風、馮雪峰、丁玲など、魯迅と近しかった作家たちが次々と失脚していった現実を目の当たりにして、しよせんは文学を政治の被害者のように語るほかはなさそう、三十年代以降にあまり研究意欲が湧かない、という心理があったかと思う。しかしそうかといって、

政治を回避して中国文学を語ることが出来ないという私の認識に変わりはない。「政治と文学」という一般的な思考の枠組み自体に疑いを抱き、二十年代の「革命文学」論との対決の中で周氏兄弟がそれぞれの立場で示した態度に共感して、「実力と文章」という、より単純直截な枠組みを考えたのは、そのためである。もともと、これとて、三十年代以降の現実には照らして検証しなければ、空論のそしりは免れないだろうが。ほかにも、周氏兄弟を并論する形の小文を幾つか書いたが、これらにも、互いに通底しあうところのある兄弟の両極の間に、中国新文学の可能性を探ろうというような意図があったと思う。また、この兄弟の傑出性の重要な来源として、彼らの清末体験、とりわけ共通の「国学」の師であった章炳麟との交渉に久しい以前から注目していて、それを文章化したのが本書の標題になっている「文学復古と文学革命」である。ところで周作人となれば、日本人としては、日中両国間の歴史問題や文学交流にかかわる方面にも関心をもたずには済まない。わたしはそのために、本書にその冒頭の一章だけを収めてある著書（『北京苦住庵記』）と、またその巻末の解説文を収めてある訳書（『周作人談日本文化』）を出したが、いずれも文革末期に、一般の中国観の混乱や中国学界のある種の虚脱を横目に見ながら、わたしとしてはかなり勤勉に仕事をしたものであった。実情は、こんな事でもするほかはなく、またこんな事をするには案外都合のよい状況だったのかもしれないが。本書の中で、紹興の「三棗街」の歴史と伝説を扱った論文は、外国人がなぜ一地方の特殊な問題にこれほど立ち入った関心をもつのかと、いぶかれるかもしれない。それは直接には、日本に、インドのカーストほど徹底した制度とは異なるものの、今も前代の賤民差別の遺制に苦しむ、いわゆる「被差別部落」の問題が存在することと関係があるけれども、周氏兄弟のような超級エリートを通じて中国文化を考えることへの不安から、彼らの故郷の地方文化にもう一つの視点を設ける、という意図もあった。この「墮民」

問題に関しては三編の論考を書いたが、ここに訳された第三編は特に、民間の口碑資料を解説する方法の実験も兼ねて、考証事に思わぬ精力を費やした。本書中では最近年の作に属する当代旧体詩詞の評釈は、雑誌に九回にわたって連載したものの一部。これは伝統詩学の素養の面で、いささかの度胸を要する仕事ではあるが、わたしにとつては、少しくらい恥をかいてでも、あえてやるだけの意義はあったと思っている。日本現代における短歌や俳句の問題との対照上の興味はいうまでもないとして、かつて遠くから手を束ねて傍観するほかなかった、同時代の中国文化界の一連の悲劇を、ようやく一定の資料と自分流の切り口によって語ることができたからである。思いがけず旧体詩詞に切り口を見いだした経緯については、連載に先立って『鼎紺弩詩全編』を紹介した一文に見られる通り。文学史上悪名のみ高い『留東外史』に関する論考は、目下在職中の神奈川大学で横浜という地縁に因み積極的に進められている、日中関係史研究に参加を求められて取組んだもの。結果は、「文学復古と文学革命」でも再評価の及ばなかったような界隈における近代化の様相を明るみに出すことになった。

趙君はこの機会に私に研究歴の総括のようなことを書かせたいらしいけれども、以上のような程度の説明で勘弁してほしい。本書に反映されているだけでも、我ながら信じがたいことにすでに四十余年もの非効率的な時間を費やして、いったい自分はなにをやったのだろうと思う。しかも、この間に激しく変転した革命建国後の中国現代史を顧み、中国のみならず、日本も世界もどこへ向かってゆくのかますます不透明な現況に思い及ぶと、今なお文学研究にとどまっていること自体が、いかにもおめでたくだらないことのように感じられる瞬間があつて、そもそも総括の意欲すら萎みそうになる。もちろん、この世にはこんなに貧しい研究の跡に関心を持ったり、苦辛してそれを翻訳してくれる友人もいることを思えば、たとえ自分のこととはいえ、投げ遣りな態度は許されない。四十

年あまりの履歴は消しようもないのだし、文学研究にとどまるか否かにかかわりなく、どのみち遠からず「閉店」の時はやって来る。だから総括はしないよりはしたほうがよいのだろう。ただ、私は中国の読者のために論文を書いたことはなく、こんな文章を集めた本が中国文学の本国の人々にどのように読まれるのか予想もつかないだけに、もしも幸いに従来考えてもみなかったような批評を受けることがあれば、それらをも参照しながら総括をしても遅くはなからうと思う。

最後に、本書の成立の遠因と、出版元変更の経緯について。あの最初の『野草』研究は、すでに私自身にもいささか訳の分からぬ文章であって、私にはこんな「若書き」の漢訳など、思いもつかぬことだった。ところが、十何年も前に、魯迅博物館の王得后さんが来日して寒斎で一夜を語り明かした時、彼の要求により、該文の要旨を拙い口頭語で説明したことがあった。それを彼がいつまでも覚えていて、とうとう数年前に漢訳に同意させられ、趙君の訳文が『魯迅研究月刊』に掲載されることになった。翻訳に当たっては、ずいぶん趙君を苦しめたが、驚いたことに、あの読みづらい日文がなんとか漢文になったのだから、ほかのものはもっと楽だろうという理由で、それがやがて本書の編訳を思い立つきっかけになったのだそうである。また、この跋文を一度書き送った後に、張君から連絡があり、本書の計画を知った北京大学の陳平原さんが、急遽、大学の出版社から刊行したいと言いだし、某社もそのことに異存はないようだが、どうか、と訊ねてきた。わたし自身はもとと出版社を選ぶ立場にないけれども、陳さんの提言は喜ばしいことであつた。というのも、わたしのこれらの文章の多くは、中国と文学に関心を持つ自国の一般読書人を意識しながら書いたのであるが、それはただわたしの意識の上でのことで、わたしには本書の内容が、本当に一般の出版社から出すのにふさわしいと主張するほどの勇氣はないから。加えて、北京大学は、

わたしにとって友人の最も多い大学であり、陳さんとは、「文学復古と文学革命」がかつて彼の手で彼らの『学人』に掲載された縁もある。

いま名を挙げた両氏とともに、錢理群、孫歌、汪暉、王瑋元の諸氏が本書のために尽力してくださった。ほかにもわたしの気づかぬ方々の支援をいただいているかもしれない。併せて心からの感謝を申し上げます。

二〇〇三年八月 於横浜